

GREEN PORT *Rep*

2026
1
January



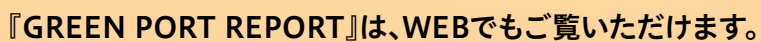
- ・ NARITA BEYOND
- ・ SAF認知度促進キャンペーン
- ・ 次世代の働き手確保の取り組み
- ・ 就労環境の改善

■ NRT APPROACH

■先生に伺いました

■協働の現場を訪ねる

ダイナミックマッププラットフォーム株式会社×
株式会社stu



◀ <https://www.narita-airport.jp/ja/company/media-center/publications-pamphlets/greenport/>

FOCUS ON! 1

NARITA BEYOND



成田空港周辺地域への送客拠点「NARITA BEYOND」がオープン

2025年8月、プラスナリタラボ株式会社は成田空港を利用する訪日旅客と空港周辺の自治体、企業、団体をつなぐ送客拠点として、「NARITA BEYOND」を立ち上げた。本取り組みでは、訪日旅客へのアプローチとして、オフラインでは第1ターミナル1階Visitor Service Center内にPRスペースを開設し、地域産品や観光情報を発信。オンラインでは観光予約サイトを開設し、ガイドツアーや文化体験を販売している。

NARITA BEYOND

という名称には、日本を訪れた方に成田空港(NARITA)から外(BEYOND)に出て、その先に広がる周辺地域との出会いを楽しんでいただきたい、という願いを込めた。ロゴは、成田空港のイメージカラーでもあるブルーと日本らしい日の丸を組み合わせ、空港から地域に広がる躍動感を表現している。



オフライン

日本の伝統美で彩った情報発信スペース



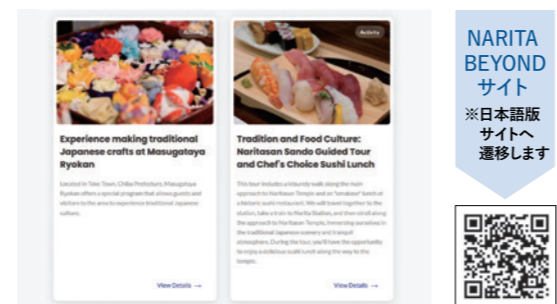
第1ターミナルのPRスペースには、「訪れてみたい」「体験してみたい」「味わいたい」といった五感を刺激する体験ができるプロモーションエリアを設置。そこでPRされている物産品がすぐに購入できる自動販売機や訪日旅客向けの観光パンフレットラック、休憩スペースを設けた。

装飾には、職人による力強い手書き文字が入った提灯、和柄を取り入れた暖簾などを配置し、日本の美を各所に散りばめた空間となっている。

オンライン

多言語対応の観光予約サイトを開設

成田空港周辺地域には、歴史や文化、食など地域ならではの魅力が多く存在する。「空港から一歩飛び出して、日本文化の深みを手軽に体験する」をコンセプトに、多言語対応の観光予約サイトを開設した。地域の行政・事業者と連携し、特色ある観光商品をさらに拡充するとともに、海外の旅行会社・メディアを通じて情報発信し、Destinyネーションとしての空港周辺地域の認知度向上と誘客促進を狙っている。



FOCUS ON! 2

SAF認知度促進キャンペーン



SAF認知拡大に向けたキャンペーンを実施

NAAは2025年11月、SAF(持続可能な航空燃料)に関する国・県・空港・航空会社・SAF供給会社の取り組みを紹介するイベント「SAF認知度促進キャンペーンin成田空港～サステナブルな空の旅 SAFと羽ばたく未来へ～」を成田空港内で開催した。SAFの導入を進めていくためには、バリューチェーン(自治体・空港・燃料生産者・航空業界・航空機利用者)が一体となって取り組みを進める必要があるものの、国内におけるSAFの認知度はまだ低い。本キャンペーンを行うことで、国・自治体・空港・各企業が行っているSAFへの取り組みを伝え、SAFの認知拡大を図った。

空港や航空業界では、気候変動問題への対応が世界的な課題となるなか、2050年CO₂排出量実質ゼロに向けて取り組



みを進めている。このうち、航空機の脱炭素化にはSAFの導入が必要不可欠とされており、国内では2030年までに航空燃料の10%をSAFに置き換える目標を掲げている。NAAとしても「サステナブルNRT2050」においてCO₂削減を掲げるなかで、成田空港のCO₂排出の約6割を占める航空機からの排出量削減に向けて行っているSAFへの取り組みを、本イベントで周知・推進した。

航空業界の一体的な取り組みとしてPR

イベントは11月11日～21日の計11日間開催。初日には主要関係者を集めた式典を行い、メディアを通してより広範囲に向けた周知をすることで、サプライチェーンでの一体的な取り組みとしてPRした。また、イベント開催中には第1ターミナル北ウイング4階の3面デジタルサイネージ前にて、展示を実施。各社の



のSAF関連動画の配信や、各社の取り組みを紹介するパネルの展示、SAFや植物油サンプル、スイートソルガム※の模型の展示などを行った。

成田空港は、今後もSAFの認知拡大を含む利用促進の取り組みを推進することで、空港としての役割を果たしていく。

※ソルガムとは乾燥、高温に強いイネ科の農作物。NAAでは、SAF導入促進の取り組みとして、SAFの原料となる「スイートソルガム」を成田空港周辺の騒音対策用地で栽培し、バイオエタノールを製造するSAFの地産地消に向けた実証実験を行っている。

▶ SAFのさらなる導入促進に向け、機運を醸成したい

航空分野の脱炭素化対策として最も有望なSAFですが、航空機利用者を含めた国内での認知度は高いとはいえない状況です。成田空港では、2020年に国内空港で初めて空港のパイプラインを用いた輸入SAFの輸送・供給を実施し、その後もSAFの供給やScope3環境価値取引の実証など、航空分野の脱炭素化に向け、積極的に取り組んでいただいております。



今回、特に航空機利用者との重要な接点となる空港を舞台に、官民におけるSAFに関する取り組みを紹介する場をご提供いただき、参加される皆さまのSAFへの理解促進につながるものと期待しております。2025年は、国産SAFの商用製造も開始され、成田空港でも供給が始まりましたが、SAFのさらなる導入促進のためには、皆さまの航空脱炭素化への理解を深め、機運醸成を進めていくことが不可欠です。引き続き成田空港とも連携し、それらの取り組みを進めていきたいと考えています。

国土交通省 航空局 カーボンニュートラル推進室長 山下 泰史

▶ 空港と地域が世界とつながる取り組みを

NARITA BEYONDを運営するプラスナリタラボは、「成田空港と地域の一体的な発展を実現する」をミッションに、「世界とつながり、楽しく豊かなまちを創っていく」というビジョンを掲げています。これからも空港周辺地域事業者と連携し、成田ならではの体験、お土産、飲食などを提供していきます。

プラスナリタラボ株式会社 代表取締役社長 福島 健之





FOCUS ON! 3

次世代の働き手確保の取り組み

今後予定されている「更なる機能強化」によって、空港全体の従業員数が現在の約4万人から約7万人に増加すると予想されている。NAAでは労働力を確保するため、成田空港のさまざまな魅力を発信すべく、職業体験イベントを通じて次世代に向けたPR活動を実施している。

空港を支える仕事と舞台裏から、航空業界のスケールの大きさを体感

その一つが、2025年7月31日・8月1日に、全国の小学校5・6年生を対象に開催した「成田エアポート ワンデー・サマースクール2025」だ。今回で20回目となるこのイベントは、成田空港を支える仕事とその舞台裏について学ぶもので、世界の都市や国内各地とつながる成田空港のスケールの大きさを直接感じていただける大人気の企画である。今回は「航空貨物」について学べる特別イベントを開催。日本のなかでも多くの国際航空貨物を取り扱う一大貿易拠点である成田空港で、普段見ることができない最先端の自動搬送システムを使った貨物取扱施設の見学や、貨物専用機のパイロットとの座談会を実施した。また、一般のお客さまは通常立ち入れない場所から迫力ある離着陸シーンを見学する体験も提供。2日間で全国から計45名の子どもたちが参加し、「普段見られない場所を見ることができて楽しかった」「航空業界に興味が湧いた」といった声が聞かれた。



2024年10月に完成した「第8貨物ビル」では、荷物をすばやく正確に運ぶ自動搬送車「AGV」が働く様子や第8貨物ビルの模型を見学し、施設に関する理解を深めた。



夏休みを利用して、2日間で計45名の小学生が参加。関東を中心に、遠方では九州から参加した小学生も。

職業体験イベントを通じて空港で働く魅力を発信

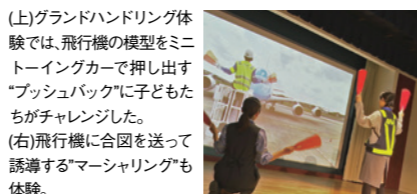
2025年8月3日には、航空科学博物館ほかで、航空業界職業体験イベント「NARITA AIRPORT JOB FES」を開催。このイベントでは、航空会社やグランドハンドリング会社などの全面協力のもと、小学生・中学生・高校生がキャビンアテンダント、グランドハンドリングスタッフ、航空機整備士など空港で働くプロと一緒に仕事を体験した。ほかにも航空会社の制服を着用したり、飛行機に機内食を載せる特別車両に乗ったりと、プロフェッショナルの気分を味わった。また、中学生・高校生を対象に現場で働くスタッフとの座談会を開催し、志望動機や職場環境など、空港を働く場所の一つとして考える上で必要な話を直接聞ける機会を提供した。

職業体験をした参加者からは「飛行機を動かして楽しかった」という声が聞かれたほか、家族全員で制服着用体験に参加いただいた方もおり、空港の仕事をより身近に感じていただくことができた。また、座談会の参加者からは「なりたいて思っていた職業と違う職業も面白そうだった」「女性も活躍しているすごい」という声が聞かれた。

NAAはこうしたイベントでの体験を通じて、小学生から大学生までの幅広い層に向けて今後も成田空港で働く魅力ややりがいを発信していく。



(上)グランドハンドリング体験では、飛行機の模型をミニトレーシングカーで押し出す“プッシュバック”に子どもたちがチャレンジした。



(右)飛行機に合図を送って誘導する“マーチャリング”も体験。



座談会では、中学生・高校生がキャビンアテンダントやグランドハンドリング、航空機整備などを行うスタッフの話を熱心に聞いていた。

FOCUS ON! 4

就労環境の改善

成田空港が世界一の高品質なサービスを提供し続けるには、空港スタッフ一人ひとりの存在が最も大切である。成田空港では、すべての空港スタッフの気持ちに寄り添い、スタッフが高いモチベーションを持ちながら、安心して働き続けられる職場環境を目指している。そのため、定期的に全スタッフを対象とした就労環境に関するアンケートを行い、その結果をもとに優先順位を付けて就労環境の改善に取り組んでいる。

心身の健康に配慮した快適な職場づくり

成田空港では、スタッフの心身の健康に配慮した職場環境の改善を進めるべく、休憩環境の整備と食事環境の向上に取り組んでいる。旅客ターミナル内では、休憩室の混雑が発生していることから拡充を進めている。今年度中に新設する休憩室の一つとして、旅客ターミナル内の共用休憩室では最大となる255㎡の「NRTスタッフラウンジ」を第1ターミナルで供用開始した。ラウンジには、多様なスタッフの要望に応えるべく充電設備を備えたシートや個室のフォンブース、スタイリングルーム、シャワールームがあり、今後は食事環境改善と併せてスタッフ専用の無人コンビニも設置予定だ。

貨物地区においても職場環境の改善に取り組んでおり、今年度は事業者からの要望をもとに女性専用ゾーンや靴を脱いでリラックスできるスペースを備えた新たな休憩室を供用開始した。また、スタッフ向け余暇スペースとして卓球場も設置しており、スタッフは無料で利用することができる。

食事環境改善の取り組みでは、旅客ターミナルエリアにおいては無人コンビニや食品自販機の拡充を進め、エプロンエリアと貨物地区においてはキッチンカーを出店している。空港スタッフが専用で利用できる食事環境のさらなる充実を進めていく。



2025年12月に第1ターミナルにオープンした「NRTスタッフラウンジ」。



食事環境の改善として、キッチンカーの誘致や無人コンビニの拡充も行っている。

成田空港ならではのスタッフ限定イベントを多数開催

成田空港では、空港スタッフが日々の業務に前向きな気持ちで取り組めるよう、空港スタッフ限定イベントの開催にも積極的に取り組んでいる。2025年8月にはスタッフとそのご家族を対象とした「青空映画祭」を開催。会場には緑日も用意し、多くの方が映画とともに楽しんだ。また、10月には貨物地区において貨物地区スタッフ向けイベントの「かもふえす2025」に加え、全空港スタッフを対象とした5日間にわたる「ちよい呑みweek」を開催。多くのスタッフが、仕事終わりに働く仲間とともに空港内でにぎやかなひと時を過ごした。さらには、四半期に1回、ランプセントラルタワーや滑走路脇などを巡る「成田空港特別見学ツアー」をスタッフ限定で開催している。普段の業務では立ち入れないエリアの見学や他業種のスタッフとの交流を通して、成田空港全体への理解を深めてもらうとともに、成田空港で働く魅力や働きがいを感じてもらう機会となっている。スタッフ限定イベントの開催を通して、成田空港で働いているからこそ特別な体験を提供している。

今後も、成田空港が持続的に成長していくためには、就労環境整備や働きがいのある魅力的な職場づくりは必要不可欠である。引き続き、空港スタッフが安心して働き続けられる空港を目指し、空港関係事業者と一体となって就労環境の改善に取り組んでいく。



2025年8月に開催した「青空映画祭」。スタッフとそのご家族が集まり、開放感のある広場で映画を鑑賞した。



「かもふえす2025」では無料で飲食を提供するとともに、緑日コーナーやステージイベントなどを開催。

暑さ対策

成田空港では、屋外勤務スタッフの暑さ対策に取り組んでいる。一例として、2025年は各ターミナルのソーティング場※にアイスディスペンサーを導入し、屋外勤務スタッフが冷水やクラッシュアイスを補給できる環境を整えたほか、一部では冷房の効いた小休憩用テントやミスト付き扇風機を夏季期間限定で試験的に導入した。



※チェックインカウンターで預かった受託手荷物の仕分けなどを行い、航空機搭載用のコンテナなどに荷物を搭載する荷捌き場。

成田空港の最新の取り組みを紹介する

NRT APPROACH

5期連続の増収

上期として民営化以降の最高値を更新

■航空旅客需要は成長ステージへ移行

コロナ禍を経て、航空旅客需要は回復から成長ステージへ移行しており、航空機発着回数は、アジア、北米路線を中心とした旅客便の新規就航や増便もあり、全体として前年同期を上回った。上期の航空旅客数は、外国人旅客数が年度上期として過去最高の1,159万人、日本人旅客数も前年同期を上回る傾向が続いたことから、航空旅客数全体ではコロナ禍以降初の2,000万人を超え、歴代3位の水準となった。国際航空貨物量も好調で、2024年4月以降、前年同月比を18カ月連続で上回って推移している。これらの結果、空港使用料収入、旅客施設使用料収入が増収となったほか、新たな需要創出を目的とした新規出店が売上に寄与し、リテール事業が増収となったことから、営業収益は、前年同期から81億円増の1,358億円となり、5期連続の増収、上期としては民営化以降の最高値を更新した。

営業費用は、引き続きコストマネジメントの徹底に努めたものの、物価上昇に伴う施設維持管理コストの増加などがあったことから、結果、営業利益は前年同期並みの225億円となった。なお、中間純利益は、「更なる機能強化」事業の進捗に伴う固定資産除却損などの発生により前年同期比37億円減の158億円となった。

■2025年度連結業績予想

足元の航空取扱量および業績が、全体として概ね想定どおりに推移していることから、2025年5月29日に発表した2025年度の航空取扱量見通しおよび業績予想に変更はない。

なお、実際の業績は航空需要など経営環境の変化により大きく異なる結果となる可能性がある。

● 2025年度中間期航空取扱量実績

区分	中間期(4月1日～9月30日)			
	2024年度 (A)	2025年度 (B)	増減 (B)－(A)	% (B)/(A)×100
航空機発着回数(万回)	12.2	12.7	0.5	104.2
国際線	9.5	10.2	0.7	107.8
国内線	2.6	2.4	△ 0.2	91.3
航空旅客数(万人)	1,992	2,080	87	104.4
国際線	1,601	1,715	113	107.1
国内線	390	364	△ 26	93.3
国際航空貨物量(万トン)	97	102	4	104.3

※単位未満は切り捨てて表示

財務部 土屋 伸一郎部長より

当中間連結決算では、成田空港をご利用いただいた多くのお客さまや、空港運営を支えていただいている関係企業などの皆さまのご協力により、物価上昇などの影響で営業費用が増加するなか、前年同期並みの営業利益を確保することができました。通期でも老朽化施設

の修繕などで減益を見込んでおりますが、引き続きお客さまに快適かつ安心して当空港をご利用いただけるよう、成長投資やサービスレベルの向上を財務面から支えてまいります。

セグメント別損益の状況

■空港運営事業

営業収益は、国際線においてアジア、北米路線を中心とした旅客便の新規就航や増便もあり好調に推移した結果、前年同期比47億円の増収の563億円。営業費用は、人件費や物価上昇に伴う施設維持管理コストの増加により、前年同期比71億円の増加。結果、営業損失は、前年同期比14億円増加し、45億円となった。

■リテール事業

営業収益は、国際線旅客数が前年同期を上回ったことに加え、新たな需要創出を目的とした新規出店が売上に寄与し、物販・飲食収入、構内営業料収入が増収となり、前年同期比15億円増収の614億円。営業費用は、人件費などの増加により、前年同期比11億円の増加。結果、営業利益は、前年同期比5億円増益の202億円となった。

■施設貸付事業

営業収益は、第8貨物ビル供用開始(2024年10月)などにより、前年同期比9億円の増収。営業費用は、人件費や物価上昇に伴う施設維持管理コストの増加により、前年同期比14億円増加。結果、営業利益は、前年同期比4億円減益の54億円となった。

■鉄道事業

営業収益は、成田高速鉄道アクセス線の線路使用料改定により、前年同期比9億円の増収。結果、営業利益は、前年同期比10億円増益の13億円となった。

●セグメント別決算概要

(単位:億円)

科目	中間期(4月1日～9月30日)			
	2024年度 (A)	2025年度 (B)	増減 (B)－(A)	% (B)/(A)×100
営業収益 ※1	1,276	1,358	81	106.4
空港運営事業	516	563	47	109.2
リテール事業	598	614	15	102.6
施設貸付事業	147	156	9	106.3
鉄道事業	14	24	9	161.9
営業費用	1,047	1,132	84	108.1
営業利益	228	225	△3	98.6
空港運営事業	△30	△45	△14	－
リテール事業	196	202	5	102.9
施設貸付事業	59	54	△4	92.4
鉄道事業	3	13	10	369.2
経常利益	220	214	△5	97.4
当期純利益 ※2	195	158	△37	81.0

※1 外部顧客への売上高 ※2 親会社株主に帰属する中間純利益

※単位未満は切り捨てて表示

先生に伺いました

【今回お聞きしたいこと】

「成田空港第2の開港」に向けて 展開すべき航空ネットワークは？

現在進行中である「更なる機能強化」や『新しい成田空港』構想の具現化といった「第2の開港プロジェクト」に向けて、成田空港が展開すべき航空ネットワークとは。九州大学大学院経済学研究院准教授の福田峻さんに伺いました。

国内外との橋渡し役を担う空港として、航空ネットワークを展開するにあたり重視すべき戦略を教えてください。



エアライン営業部
西目 圭樹さん

航空ネットワークの特性と現状

航空便は、他の交通機関と比較してどのような特性を持っているだろうか。さまざまな要素が指摘できようが、筆者が重要であると考えるのは、発着地に飛行場というインフラさえ整っていれば、その間の障壁を飛び越えて直接都市を結ぶことができる点である。島国である日本から外国へ向かうには海を越えねばならないし、国内においても新幹線などの地上の高速交通インフラはいまだ全国にあまねく整備されているとは言えない。そのなかで、地上の条件を問わず高速の移動を提供する航空便は、異なる産業や文化を持つ都市との間を直接人が移動し、知識・情報をやり取りすることを可能にする。知識の交換は、新たな価値を生むイノベーションの源泉になるだろう。

成田空港・羽田空港を合わせた東京全体の国際線航空便就航都市は、2019年8月時点で119都市に上り、その10年前の94都市から大きく増加しており※1、コロナ禍での減少を経て再び回復している。こうした増加の中心と

なっているのは、成長が著しく、巨大都市が多く出現しているアジアである。特にこうした近距離の都市と都市の間では、ハブアンドスポーク型※2のネットワーク構造ではなく、直接的に都市間を結ぶ動きが近年広がっている。成田空港においても、アジア各国の首都に限らないさまざまな都市とダイレクトな接続を実現している。国内に目を転ずれば、以前は国際線乗り継ぎ用の便などに限られていた成田空港の旅客便就航都市は、現在では18都市に上る※3。

さらなる交流への期待

無論、こうした直結都市の拡大の第一義的な要因は観光客の増加であろうと考えられ、知識や情報の流れには直接結び付くものではないかもしれない。しかし、観光需要に支えながら直接人々が交流できる環境が整っていれば、それ以外の目的の移動も可能になり、多様な都市に蓄積された知恵やアイデアがやり取りされることも想定される。

感染症の流行や安全保障上の問題などの不確実要素をはらみながらも、

さまざまな都市が直接接続され新たな価値を生み出していく傾向は、大局的には今後ますます拡大していくと考えられる。航空便がもたらす人や知識の流れに国境は関係ない。都市間接続のネットワークが広がっていくこれからの時代において、内際問わない交流の港として、成田空港がさらなる成長を遂げることを期待したい。

※1 福田峻(2024)「日本における航空ネットワークの歴史の変遷とその特性」『都市計画論文集』59(3)、1422-1429

※2 大規模空港などの中心拠点(ハブ)に旅客や貨物を集約させ、そこから各拠点(スポーク)に分散させる輸送方式のこと

※3 成田空港WEBサイトの情報による。2025年10月29日現在



国内外の都市間を直接つなぎ
新たな価値を生み出す
交流の港として、

成田空港の有する
ネットワークのさらなる成長が
期待されます



答えてくれた先生は —— 福田 峻さん

九州大学大学院 経済学研究院 准教授、博士(工学)。東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻博士後期課程を修了後、岡山大学学術研究院 社会文化科学学域 准教授などを経て、2025年より現職。国土計画、地域科学を専門とし、経済活動の分布、知識や交通のネットワークについて研究している。

「第2の開港」を象徴する点群アートを公開 アートとテクノロジーの融合で新たな価値創造を

成田空港が目指す「第2の開港」をアートとテクノロジーで表現した映像作品の公開が、2025年11月から各ターミナル内で開始された。実際の成田空港の敷地および建物を計測した点群データ※を素材として用いてアート映像に昇華したこの作品の制作秘話を、制作に携わったダイナミックマッププラットフォーム株式会社の久保田氏、株式会社stuの杉野氏、NAAの五十嵐氏に伺った。

空港は人々の想いととも 未来へ進化していく

五十嵐: 今回のアートの発端となったのは、2025年5月に開催した、成田空港が抱える課題を探索し、高精度3次元データを活用した課題解決と新たな価値提供のアイデアを、システムデザイン思考を用いて創出するワークショップ。ワークショップでは「点群データを花火のように舞い散らす」というアイデアが採用に。独自性がある、空港のお客さま層にマッチしながら高揚感も創出する内容が、審査員に評価されたのだと思います。

久保田: ワークショップでは、弊社が事前に計測した空港の点群データ画像を囲んで議論したのですが、点群データとアートを掛け合わせるのには弊社も初めてで、今までにないものが空港利用者の記憶に残るのではないかとチームで考えました。実際にアートを制作するにあたり、弊社は点群データを取得する計測機器を付けた「MMS」という車両を空港に搬入。NAAさんのお力添えで安全に走行し、アートに使用する点群データを取得できました。

杉野: 私は作品映像制作を担当したのですが、ご提供いただいた点群データは、データを構成する点の数が130億個、データサイズは数百GBにも及ぶ膨大なものでした。データとしては「無機質な座標の集まり」にすぎなかったものを、アーティスト視点から「魂の宿った作品」に昇華させるため、NAAさんとコンセプトや表現の方向性のディスカッションを重ね、ビジョンを実現するためのビジュアルパターンを弊社で試作。DMPさんに技術的なサポートをいただきながら進めました。

空港は、いつの時代も「人々の想い」が集まるエネルギーの交差点だと考えています。私たちは点群データの点の一つひとつを、その場所を支える人々の「魂」であり、行き交う旅客の「想い」そのものであると見立てました。その無数の想いが集積し、時に粒子となり、時に大きなうねりとなってダイナミックに変化していく。それがまさに成田空港が目指す「未来の空港」の姿であり、物理的な空港が人々の想いとともに進化していく様です。このアートを通し、成田空港が持つエネルギーのダイナミズムを感じていただけたらと思います。

五十嵐: 点群アートで描く「第2の開港」をどのように表現するかという部分で、クライマックスの描写を形にする作業はとても大変でしたが、何度もstuさんと意見を交わしながら最終的には皆が納得するものが完成。私にとっては想像を超える、技術と熱意がこもった約60秒の映像ができ、心が震えたのを覚えています。



各ターミナル内のデジタルサイネージで、アート映像を放映中。



点群アートとドキュメンタリー映像はこちらから



NAA空港計画部
イノベーション
推進グループ

五十嵐 有美さん

【点群データ提供】
ダイナミックマップ
プラットフォーム株式会社(DMP)

久保田 涼太郎さん

【アート制作および空間演出】

株式会社stu

杉野 裕則さん

「空港の枠を超えた空港」を目指し 新たな価値を共創したい

五十嵐: 11月5日にはお披露目イベントを開催。さまざまなメディアに取材していただきました。SNSでもポジティブな反応がありうれしく思います。

杉野: イベントでは多くの方が足を止め、光の粒子で描かれた空港の姿に静かに見入ってくださったのが印象的でした。何よりうれしかったのは、NAAの社員の方々や空港で働く皆さまからの「自分たちの仕事場が誇らしく表現されている」というお言葉。テクノロジーが日常に新たな感動や誇りをもたらす可能性を示せたのではないかと感じています。今後もデータを活用した空間演出や、人々を魅了する体験価値を創造し続けていきたいと考えています。

久保田: イベントは想像以上の反響で、点群データの表現手法の新たな可能性を感じました。今後はアート以外にも、空港内の自動運転やグランドハンドリング業務の高精度ガイダンスなど、弊社がかねてより進めてきた実践的な分野をはじめ、来訪者の体験向上につながるさまざまな形で弊社の技術を広げていきたいと考えています。

五十嵐: このアートを通じて、成田空港が「第2の開港」に向けて取り組むことでインフラ施設の枠を超え、「空港機能の役割を超えた空港」になることを社内外に伝えるとともに、空港と周辺地域の新しい未来を多くの方に楽しみにしていただきたいですね。そして、その未来と一緒に創るパートナーを見つけ、今後も共創による新たな価値を空港に還元する取り組みを進めてまいります。

※GPS、カメラ、レーザースキャナなどの計測機器で計測された、3次元空間における物体や地形を無数の点の集合体で表したデータのこと。各点一つひとつが緯度・経度・高さの座標情報を持ち、車の自動運転やインフラ管理など多岐に渡る領域で活用が進められている。

Check!

ご意見・ご感想などございましたら、こちらの二次元コードを読み込んでお送りください。

